



Title	置戸町田付遺跡出土の磨製棒状石製品：機能の類推
Author(s)	中沢, 祐一; Nakazawa, Yuichi
Citation	北海道大学考古学研究室研究紀要, 3, 57-68
Issue Date	2024-02-22
DOI	https://doi.org/10.14943/109189
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91240
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_3_nakazawa_57-68.pdf



置戸町田付遺跡出土の磨製棒状石製品

—機能の類推—

中沢祐一

要旨: 北海道東部常呂川上流域の置戸町に位置する田付遺跡より出土した磨製棒状石製品について報告した。類例となる道央部石狩低地帯南部のアンカリトー7遺跡出土の磨製石製品との比較を通して、形態的特徴をまとめた。いずれも出土層序と石器群の技術的特徴から後期旧石器時代の遺物と判断される。さらに、形態面で類似する旧大陸および北米の磨製骨角器と比較し、磨製棒状石製品の機能的役割について、飛び道具などの有機質の組み合わせ道具を製作する際に見本となった「模範品」という解釈を提示した。

I. 目的

北海道東部の常呂郡置戸町に位置する田付遺跡より回収された「磨製棒状石製品」について記載する。当該資料は、これまで注意されていなかった種類の遺物だが、いくつかの理由から後期旧石器時代の石器群に属すると考えられる。本稿では当該遺物の形態的特徴を記載し、道具としての機能面についての類推を行う。

II. 置戸町田付遺跡の調査と出土した石器

(1)調査経緯

田付遺跡は、北海道東部の常呂郡置戸町に位置する。置戸町は、常呂川上流域の山間部の狭隘な地域であり、林業を中心として開拓された土地である。常呂川の北側には黒曜石を産する所山と置戸山を擁し、黒曜石を用いた石器が多数散布する遺跡が段丘上に分布することが開拓時より知られている。田付遺跡の調査は、こうした黒曜石の石器を産する遺跡調査のごく初期の 1950 年代になされた。北海道大学医学部解剖学教室第二講座(解剖学第二講座)が調査主体となり、昭和 31 年(1956 年)と昭和 32 年(1957 年)に発掘調査が実施されている。この一連の調査によって出土した遺物は、置戸町から北海道大学の所在する札幌まで移され、大場利夫らによって整理がなされていたようであるが、昭和 41 年(1966 年)に調査者の大場が北方文化研究施設へと異動したこともあり、存在自体も忘却された(中沢 2020)。

医学研究院人類進化学教室は、平成 24 年(2012 年)より解剖学第二講座の考古資料の保管管理を担当することとなった。以降、学術資料とするための整理作業を継続している。置戸町由来の遺物については、筆者や矢原史希らが、平成 28 年(2016 年)から整理に着手した。これまでに中里遺跡(中沢・矢原編 2017、矢原・中沢 2018)、田付遺跡(中沢・伊藤編 2021)を報告した。置戸町における調査経緯、遺跡および遺物の詳細はこれらのカタログに詳しい。以下、概要を簡単に述べる。

置戸町における調査は、解剖学第二講座の講師であった大場利夫が指揮をとった。その陰には藤川尚位

氏や三浦昭氏など町内在住の理解者の協力があつた。常呂川の左岸に形成された段丘上に位置する田付遺跡は、当時は後藤政雄氏の土地であり、畑として利用されていた。調査時には、田付遺跡という名称ではなく、後藤政雄氏の畑や地区・地点名によって示されていた(田付遺跡の場所は、第四地区→第一地区→第三地点という変遷があつたと考えられる)。後に田付遺跡として登録された後藤氏の畑に、相互に離れたA～D地点と呼ばれた4つのトレンチが設けられ、発掘がなされた。表面採集品を含む 3799 点の石器が回収された。ラベルや写真記録に基づく発掘地点の基本層序は、第1層(黒色土層)、第2層(褐色土層)、第3層(火山灰質粘土層)、第4層(粘土層)、である。遺物を収納していたと思われる封筒の記載や遺物の注記の解読からは、すべての層位から遺物が出土したようだが、中でも第2層からの出土遺物が7割(2638/3799 点)に及ぶ。

地点別の遺物出土点数はばらつく(A地点:1091 点、B地点:1600 点、C地点:158 点、D地点:912 点)。トレンチの形状と規模の記述も残されているが、記録資料(大場の未発表原稿、図面のトレンチの範囲、調査写真)^{註1}のあいだに齟齬がみられる。そのため、トレンチ間の遺物量の多寡が、括られた遺跡(畑の中の散布地)内の分布の粗密を示しているのか、トレンチサイズの違いに比例した出土量の差なのかは、検討の余地がある。

(2)石器群の特徴と地点間変異

石器群の内容は、技術面に共通性がある。地点によらず、石刃とそれを素材とする石器が多数出土している。石器の中ではノッチ(挟入石器)が最多となる(195 点)。これらは石刃や剥片の側縁に内湾する1～複数の挟りを作出した剥片石器である。挟りが独立せずに複数連続する鋸歯縁石器や挟りと二次加工がともなう複合石器(ノッチ/削器、ノッチ/搔器)も少量認められる。削器も 165 点と多い。ノッチ、鋸歯縁石器、削器はA～D 地点すべてより出土している。一方で搔器(32 点)や彫刻刀形石器(21 点)は少なく、ノッチや削器の点数の 20%以下である。磨製石器も出土している。斧形石器に分類できる小型の剥片素材の石斧が2点ある。また磨製石器には本稿で紹介する磨製棒状石製品1点も含まれる。

石刃は打面が小さく、打面と背面が接する部分が擦られた石刃が一定量認められる。石刃の頭部を擦る調整技術は、北海道の後期旧石器時代のいくつかの石器群で共通してみられる(鈴木 2016、直江ほか 2016)。また、A地点とD地点から回収された遺物には広郷型細石刃核が確認されている。一方の細石刃は、A～D地点のいずれでもそれほど回収されていない^{註2}。C地点からは明確な広郷型細石刃核はみられないものの、他の地点と石器組成が近似する。概して、全地点で石刃製作とそれを用いたノッチや削器を利用した活動との関連がうかがえる。

B地点はいくつかの点で他の地点と特徴を異にする。第一は細石刃核の形態的特徴である。B 地点からは数点の剥片素材の細石刃核が出土している。これは石刃を素材とする広郷型細石刃核の典型例ではない。あえてあげるならば、石核調整を極小化している点(鶴丸 1985)で広郷型との共通性をみることができる。細石刃核よりも、むしろB地点に多くみられる石核は、打面調整を行わず不定形な剥片を剥離した様々な大きさの角礫や亜角礫を素材とするアモルファスな石核である。第二は、石器の組成である。B地点では両面調整体が一定量(20 点)出土している。製作途次で器体が破損した資料も認められる。B地点では石刃の製作と利用に加えて、両面調整体や不定形な剥片の製作などがなされたのとらえられる。B地点に典型的な広郷型細石刃核が見られないことから、A、C、D地点のみを広郷型を伴う細石刃石器群(以下、広郷型細石刃石器群とする)とくくことも可能である^{註3}。他方で、B地点の遺物量が全体の 44%と最多である点が注意される。B地点が他の地点よりも石器製作の内容が多様であるのは、単純にサンプルサイズによる説明も可能だろう。その背景には、B地点における活動が他地点よりも累積的であったことが考慮されよう。

Ⅲ. 磨製棒状石製品について

本稿で記載する「磨製棒状石製品」は、A地点から回収された遺物の中に含まれる。上記したようにA地点は広郷型細石刃石器群ととらえられる。カタログ（中沢・伊藤編 2021）では、長軸方向に研磨痕を有し、断面が楕円となる点や両端の欠損などの特徴を確認した。あらためて、記載をこころみる。

(1) 形態的な特徴

本石製品は、両面が等しく研磨され平坦となり、側縁も外湾するように加工されている。磨製石斧程ではないものの、表面全体が円滑である。面取りや剥離痕によるゆがみはない。横断面形は楕円であり、上下左右に对称となる。全面に長軸方向の研磨痕が認められる。研磨痕と重複して、径 1mm 未満の微細な窪みが多数みられる。石製品の表面整形の過程でなされた敲打の痕跡と考えられる。

両端が欠損するため、石製品の上下や先端と基部といった関係は不明である。ただし、写真(図1)の下にある端部に向かってやわずかに幅が狭くなることから、写真下部の欠損方向へ向かってすぼまるような形状の道具だったと推測できる。写真下部の欠損部は、端部からの加撃による二枚の縦長の剥離痕からなる。大きいほうの剥離痕は写真右の面へ、小さいほうの剥離痕は側面へと抜けている。いずれも末端はステップフラクチャーとなる。これらの二枚の剥離痕が接する稜上は摩滅する。

一方、写真上部の欠損部は、斜めに断ち切られたような欠損状態となる。右上から左下にかけての一回の加撃による破損だったと推定できる。写真右上となる平坦な器体の一端に打点が認められる。欠損面は下端の欠損面よりも凹凸があり、裏面に接する部分は鋸歯縁状となる。以上の形態的な特徴から、本石製品を「磨製棒状石製品」と呼称する。

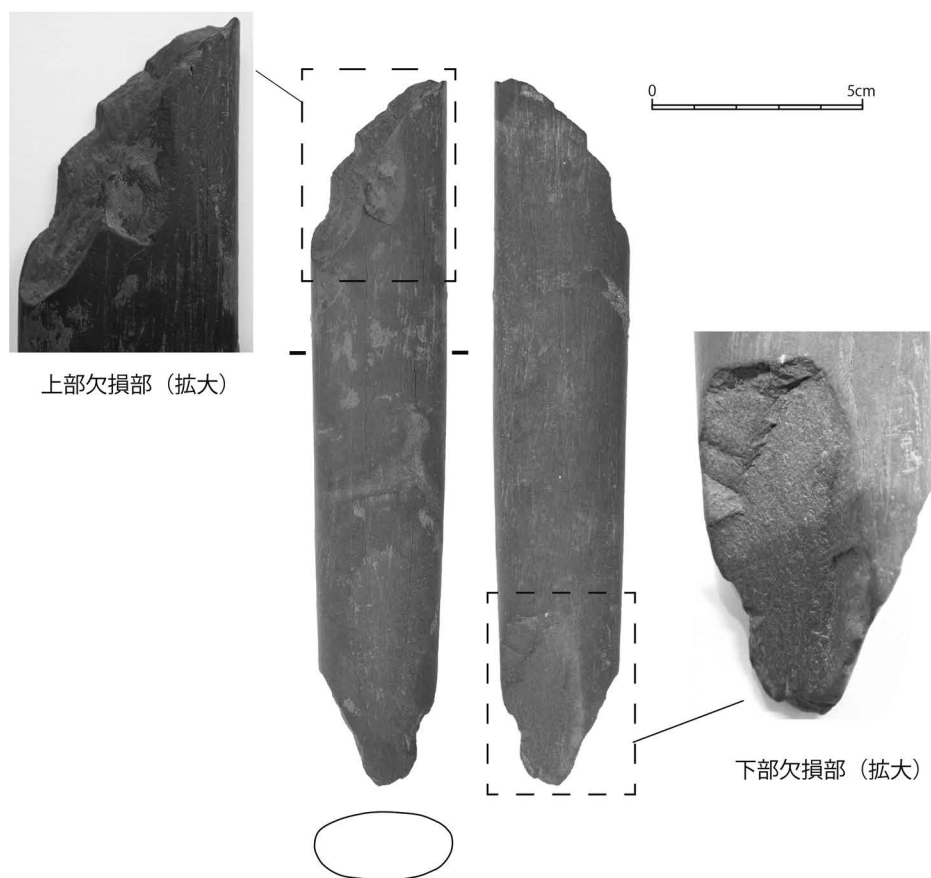


図1 田付遺跡出土の磨製棒状石製品 (ID 1101-2-2-1-1-810)

中央写真は中沢・伊藤編 (2021) より。欠損部拡大写真および断面図は筆者作成。

(2)形態以外の特徴

器体には全面に堆積物がまばらに付着しており、全体的に赤褐色を呈する。とくに固着した土と分かる部分では内部に石英粒子が含まれていることから、ローム層と推測される。色調からも、酸化などの作用によって赤化したローム層の付着と思われる。同様な赤褐色の堆積物の付着は、A 地点の剥片石器に観察される。石材本来の色調は灰色であり、緻密な堆積岩と考えられる。長軸の長さが 172 mm、幅 33 mm、厚さ 15 mm、重さ 144g である。

器体には長軸方向に平行して細い筋状の亀裂がいくつか伸びている。

(3)観察のまとめ

観察所見をまとめるならば、器体表面の研磨が著しいのが特徴である。両端部が欠損しているため、本来の長さや形状に関する情報は欠落するものの、器体の側縁が平行である点、断面形からうかがえるように、上下左右に均等に器体が整えられている点からは、全体形状を作り出すことに大きな労力を注いだことがわかる。器体部分は筆者(成人男性)が握っても、保持するのにちょうどよく、器体部分を握ることを意図して製作された可能性がある。上下の欠損については、折れではなく大きな剥離痕であり、器体に加えられた強い打撃によると推測される。片側(下半部)の欠損部に若干摩耗した痕跡があるため、これが機能部かどうかは別として、破損後もしばらくは廃棄されなかった可能性がある。器体にみられる微細な亀裂は、これらの亀裂内に酸化鉄がほとんどないことから、発掘後の遺物運搬時や保管時における劣化によって生じたと考えられる。

この磨製棒状石製品は、第2層(褐色層)からの出土である。第2層は、上記したように出土遺物の7割が回収されている。また調査写真からは、第2層は黒土(第1層)の下に堆積するローム層に該当するとみられる(中沢・伊藤編 2021)。整理時には上層からの混入も疑われたが、上層となる第1層(黒色土層)からも第2層と特徴がかわらない石器が出土していることから、A 地点の石器群は、第2層を中心として包含する一体の石器群であり、磨製棒状石製品もそこに含まれるととらえた。磨製棒状石製品の器体表面に付着する赤褐色の堆積物も A 地点出土の他の剥片石器にも認められる痕跡であることから、磨製棒状石製品が他所から混入したのではなく、同じ A 地点から由来したことがうかがえる。

IV. 類例との比較

A 地点の石器群が広郷型細石刃石器群に該当するだろう点を考慮すると、磨製棒状石製品も広郷型細石刃石器群を構成する遺物の可能性が考えられる。現時点で類例が1例のみ確認できる³⁴。同じ広郷型細石刃石器群である道央部の千歳市アンカリト7遺跡出土の磨製の石製品である(図2)。当該石製品は SB-1 と呼ばれる斜面傾斜方向に広がる1カ所の石器集中に含まれる。広郷型細石刃核が複数出土した広郷型細石刃石器群である。出土層位は恵庭 a 降下軽石の上に堆積する黄褐色ローム層(第 VII 層)であり、後期旧石器時代の文化層に相当する。一方、調査者ら(北海道埋蔵文化財センター2010)は当該石製品と広郷型細石刃石器群との伴同関係についての判断を留保している。

(1)アンカリト7遺跡出土石製品の特徴

当該石製品は全面が研磨され平滑である。縦方向の線状痕が肉眼でも確認できる。線状痕は斜めや横方向にも走るが、大部分が器体長軸に沿った縦方向である。線状痕の内部には黄色のロームが入る。片方の端部がすばまる先細りの形状である。断面は円形である。器体中央部付近で欠損している。石材は緑色であり、「粘板岩」とされる(北海道埋蔵文化財センター2010)。器体の縦方向に緑色と黒色の層理が平行する。長軸の

長さが 118 mm、幅 23mm、厚さ 21 mm、重さ 87.01g である。

器体にロームが付着する点は、当該遺物が黄褐色ローム層(第 VII 層)から出土した発掘所見と矛盾しない。ローム層(第 VII 層)よりも上位の第 II 黒色土層(V 層)およびローム層との漸移層(VI 層)から縄文時代の遺物が少量検出されているが、石棒など形態が類似する遺物はみられない(北海道埋蔵文化財センター2010)。

(2) 田付遺跡とアンカリトー7遺跡の相違点と共通点

田付遺跡 A 地点出土の磨製棒状石製品とアンカリトー7遺跡の相違点および共通点をみる。まず相違点は、田付遺跡の石製品に比べてアンカリトー7遺跡の石製品は片側が欠損していないため、先端がはっきりとしている。断面形状は、田付遺跡の石製品が楕円形であるのに対し、円形である。表面の研磨状態も異なる。田付遺跡は研磨しているものの線状痕は田付遺跡の石製品のほうが細く、そのため円滑である。共通点については、(田付遺跡ではわずかであるが)端部へ向かって器体がすばまる点、入念な器体の研磨、端部の欠損、石材が剥片石器に利用される石材と異なる点、などがあげられる。また、全体のサイズも近い。長さは 12~17 cm、幅 2~3 cm、厚さ 1.5~2cm である。

棒状の形態を作り出すという製作の意図は共通する。とくに、線状痕が器体長軸方向に平行する点に製作方法の共通性がうかがえる。おそらく研磨に用いた道具と石製品の素材となった石器石材との関係によって器体の平滑度の差が生じていると思われる。いずれにせよ、断面が楕円もしくは円形になるまで棒状に仕上げるという工程があったと考えられる。このように目的とする形状および製作工程面の共通性から、アンカリトー7遺跡出土の石製品も磨製棒状石製品へと分類できよう。

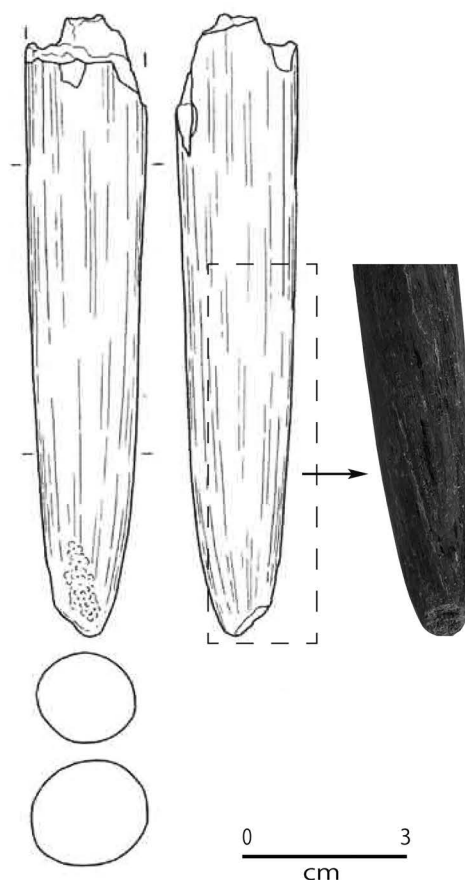


図2 アンカリトー7遺跡出土の磨製棒状石製品

実測図は北海道埋蔵文化財センター(2010)より
写真は筆者撮影

V. 形態的類似と機能的類推

それでは、磨製棒状石製品はいかなる種類の道具なのだろうか。すでに確認したように、器体表面を円滑に研磨して全体形状を棒状とする点に多くの労力を投下していることから、棒状の部分を持して用いるような道具として用いられたことは明らかだろう。

(1) 縄文時代の石棒との差異

棒状に磨いた石製品としては、「第二の道具」(小林編 1988)の範疇となる石棒や石剣・石刀がある。石棒は敲打や研磨によって円柱形や棒状に整形したもの、石剣や石刀は丹念に研磨し両側縁・片側縁ににぶい刃をつけるものであり、端部には柄頭と呼ばれる亀頭状の突起があり、しばしば線刻(沈線、幾何学文様など)が

施される(野村 1985)。前者の石棒が広く東日本に分布するのに対し、後者の石剣・石刀は縄文晩期に東北・北海道を中心に分布する(野村前掲)。棒状の全体形状からは磨製棒状石製品との類似が認められる一方で、縄文時代の石製品は細部において磨製棒状石製品とは異なると思われる。例えば、アンカリトー7遺跡の位置する石狩低地帯のキウス環状周堤墓に副葬される縄文時代の石棒は、両端に線刻のある突起が作り出され、呪具としての役割が推定される(大谷 2010)。一方、磨製棒状石製品に突起や線刻はなく、大きさも片手で保持できる程度で軽量である。断面形については、円形なアンカリトー7の資料と類似するが、田付遺跡の磨製棒状石製品は左右上下対称の楕円形であり、多少の変異がある。石剣・石刀の中には野村(1985:156)のC型のように横断面が楕円となる形態もみられるため、石棒や石剣・石刀のヴァリエーションの中にはここで記載した磨製棒状石製品に形態的にもサイズの的にも類似する遺物がありえることは否定できないだろう。しかし、上述したように当該遺物が旧石器時代の遺物包含層から検出されていること、類例が少ないものの由来する石器群が共通する点(広郷型細石刃石器群)から、後期旧石器時代の所産と考えて議論を進めたい。

(2) 周辺地域における骨製尖頭器・骨製棒との比較

日本の旧石器文化と対比可能な旧大陸の旧石器文化や北米の先史文化において棒状に研磨された道具を考えるならば、石質よりも有機質の道具に類例が求められよう。骨製尖頭器(bone/osseous point)や骨製棒(bone/osseous rod)などの磨製の骨角器である。骨製尖頭器はヨーロッパの後期旧石器時代前半期初頭(オーリナシアン)から中石器時代まで広く用いられる。素材となる鹿角やマンモスの牙などを切裁・研磨して仕上げた尖頭器である。オーリナシアンの骨製尖頭器は、先端よりも基部が幅広となり、基部内部には側縁も取り込んだソケット状の挟りがある形態が特徴である。基部が割れた骨製尖頭器(split-based bone point)と呼ばれ、オーリナシアンの文化的な指標でもあり、槍の柄などに装着したと考えられている(Knecht 2000, Tejero 2016 など)。マグダレニアン(後期旧石器後半)では鯨骨製の尖頭器(Pétillon 2013)が知られている。この尖頭器は端部が斜めに切裁されたり、ハサミ状の切れ込みが入っていたりといくつかの形態的ヴァリエーションがある。幅は2 cm 未満、厚さも 1.5 cm 程で、断面形は円形～楕円形の棒状に作り出されている。極北シベリアではヤナ RHS 遺跡より出土した後期旧石器時代の骨角器が注目される。マンモスの牙から素材となる破片を棒状に切りだし、研磨することが知られている(フロパーチェフ・ギリヤ 2019, Pitulko *et al.* 2015)。

骨製棒は、主として北米パレオインディアンのクローヴィス型尖頭器を伴う石器群にみられる特徴的な道具である。マンモスやマストドン の長骨や稀にはマンモスの牙を素材とする棒状(竿状)の道具であり、断面が円形、楕円形、長方形を呈する(Sutton 2018)。ブラックウォータードロ遺跡第1地点(ニューメキシコ州)よりマンモスの骨およびクローヴィス型尖頭器と共伴して発見されて以来、類例が蓄積されている(Boldurian 2007)。サットン(Sutton 2002)によれば、北米 21 カ所のクローヴィス文化を中心とする遺跡から骨および牙で作られた棒が確認され、13,000 年前から完新世初頭まで存続したとされる。例えば、アンジック遺跡(モンタナ州)はクローヴィスに相当する埋葬小児人骨が発掘されたことで著名だが、そこに副葬されていた多数の石器(尖頭器とそのブランク)および骨角器の中に骨製棒が 11 点(接合前の破片は 15 点)含まれる(Lahren and Bonnicksen 1974)。

磨製棒状石製品が骨製尖頭器や骨製棒のように狩猟具の柄や尖頭部へ装着された道具だった可能性はあるのだろうか。アンカリトー7遺跡出土の磨製棒状石製品については、先細る一端には石材の節理をわずかに残すものの、器体上部から連続的に先端部まで研磨されており、研磨痕に重複するような別の擦痕などの痕跡はみられない(図2)。田付遺跡 A 地点の磨製棒状石製品については両端が欠損しているため、判断材料が少ないが、アンカリトー7遺跡の例と同様、装着を想起させるような器体の研磨痕に重複するような擦痕など

はみられない。

明確な装着痕跡は見いだせないものの、骨製棒を参考にするならば、磨製棒状石製品も有機質の柄などへ結わえて、組み合わせて利用した可能性が考えられる。ただし、骨製と石製では重さに大きな違いがある。クローヴィス文化期の骨製棒は、一端か両端が斜め方向に断ち切られ、表面に線刻が施されることが多い (Haynes 2002, Sutton 2018)。骨製棒の使い方については諸説あるものの、断ち切られ部分をフルーティングによって薄く加工された尖頭器の基部に当てて紐で結わえたという考えが主流である (Haynes 2002)。このことから、石製尖頭器 (クローヴィス尖頭器) と槍柄を結合する中柄として、ふたつのパーツを連結させたと考えられている (Haynes 2002, Lahren and Bonnicksen 1974, Lyman and O'Brien 1998)。こうした組み合わせ道具のパーツとして石を採用する場合、道具全体の重量は増すだろう。パレオインディアン研究者が考えているような、石製尖頭器である尖頭部と有機質の柄部を結合させることによる安定性 (滑り止め) や狩猟時における着脱利便性が骨製棒に求められたとするならば (Lahren and Bonnicksen 1974)、それを表面が円滑な石製品に置き換えることはふさわしくないだろう。もちろん中柄の軽重による先端部への加重や減量がリスクとなるのか利点となるのかは実験的検証が必要であり、磨製棒状石製品が石製尖頭器を用いた飛び道具 (投げ槍など) のパーツそのものであった可能性も考慮されよう。

一方で、尖頭器と主軸 (柄) という二つのパーツをつなぐ点では形状のみならずサイズにも一定の規制があったと考えられる。磨製棒状石製品の端部が欠損していることや、骨製棒では長さよりも幅のばらつきが小さく規格적であるという所見があることから (Bradley 1995)、幅と厚さの属性データを検討した。2点の磨製棒状石製品の幅と厚さに加え、クローヴィス文化を含む北アメリカの更新世末から完新世初頭の骨製棒および骨製尖頭器の幅と厚さをプロットした (図3)。後者のデータは、近年公表された集計 (Wygall *et al.* 2021) から幅と厚さが

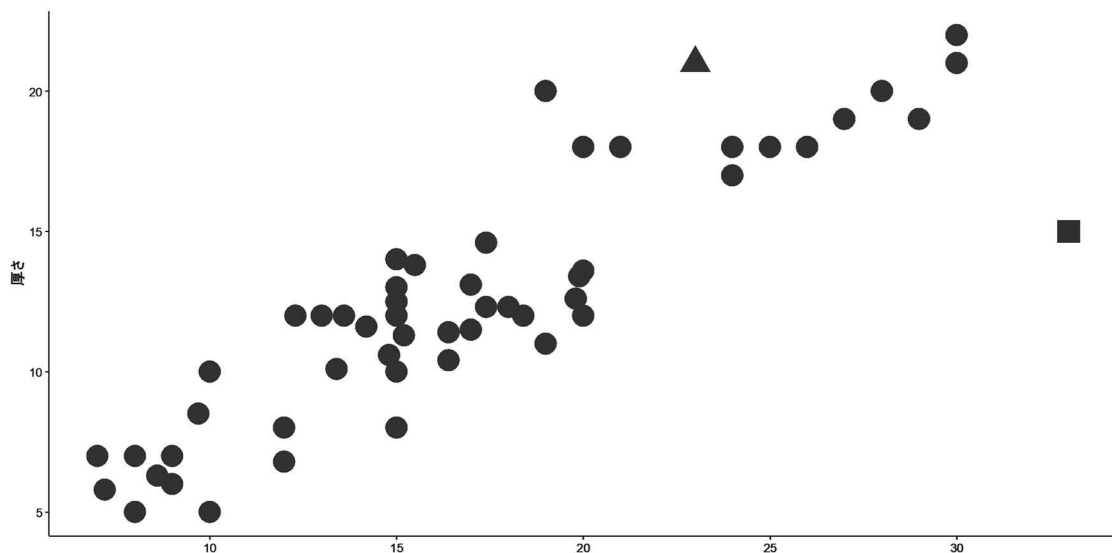


図3 骨製棒・骨製尖頭器と磨製棒状石製品の幅 (横軸) と厚さ (縦軸) のプロット図

単位はミリメートル。骨製棒・骨製尖頭器のデータは、Wygall *et al.* (2021) より。

骨製棒と骨製尖頭器 (●)、磨製棒状石製品 (■田付遺跡、▲ アンカリトー7 遺跡)

そう 57 点の数値を利用した。幅と厚さは相関する(ピアソン相関係数 $r=0.8887$, $df=57$, $p<0.001$)。アンカリトー 7 の磨製棒状石製品は大型の部類に含まれる。一方の田付遺跡の資料は全体の分布からはずれて位置する。骨製棒・尖頭器の傾向に比べると、厚さに対して幅が広くなる。すなわち、磨製棒状石製品は骨製棒・尖頭器よりも幅で厚みがあるという特徴がある。幅の規格度が高いという骨製棒の特徴からすれば(Bradely 1995)、とくに田付遺跡の資料は過度に幅広であるため、骨製棒の「代替品」という解釈はできそうにない。

(3)磨製棒状石製品の機能に関する解釈

磨製棒状石製品の道具としての機能について、骨製尖頭器や骨製棒との形態的類似の観点から検討してきた。形態から推定される刺突のための組み合わせ道具といった可能性はあるものの、観察された諸パターン(幅と厚さの変異など)からは決定的ではない。ならば、生業活動への利用を目的としない「非実用品」なのであろうか。例えば、縄文時代の石棒や石剣・石刀などとの類似から呪具や象徴品という解釈である。今のところ類例が2点である点からは、少なくとも磨製棒状石製品は他の石器(剥片石器など)に比べて廃棄率が極めて低く利用期間が長かった道具であったことがうかがえる。利用期間の長さは非実用性を支持しそうではあるが必ずしも実用品と非実用品を分ける基準にはならないだろう⁵⁵。

ここでは仮説的であるが、非実用品や実用品という区分ではなく、生業用具の「模範品」の可能性を提示したい。当然ながら棒状に作られた有機質の道具の存在を前提としなければ「模範」となったことの証明にはならないが、棒状の道具を完成させるまでには労力を費やす一定の手順を経ねばならないことは注意される。例えば、クローヴィスの骨製棒の素材となった大型獣の長骨やマンモスの牙は自然状態では湾曲するため、湯へつけて真っすぐに整形する工程の存在が想定されている(Lahren and Bonnicksen 1974)。シベリアの旧石器でも、反ったマンモスの牙を水につけて加圧する矯正工程が実験に基づき指摘されている(フロパーチェフ・ギリヤ 2019)。磨製棒状石製品の器体整形も、素材から道具への加工に労力を要する点で同様である。骨や牙の場合、素材自体を動物から得るため、狩猟・解体活動という生業活動が素材獲得に先行する(Pitulko *et al.* 2015)。運よく大形の獲物が得られ、適切な素材となりうる骨や牙が獲得できた場合でも、製作者側にはあらかじめ作る物の形状や大きさについての知識が必要である。また、複数のパーツや様々な素材から成る組み合わせ道具の製作には、素材の大きさや形状への制約があったと考えられる。製作経験者が非経験者へ製作法を伝える場合に、目的製作物の基準となる物があることが望ましく、パーツを結合させる複雑な道具ほど「見本」が有効となったであろう。狩猟採集社会は概して小集団であり、技術伝承などによる知識の維持は人口の影響を受けやすい(Henrich 2004)。集団の適応度を高めるためには生業に直結する道具製作に関する知識が正確に共有・伝達されなければならない。資源も時間も限られており(Torrence 1983)、いわゆる「目で見て盗む」的な伝達方法では道具製作はおぼつかない。石製の「模範品」が道具製作の場面で活用された社会を考えることに大きな飛躍はないだろう⁵⁶。

VI. まとめ

置戸町の田付遺跡A地点より出土した磨製棒状石製品の記載を行った。また類例となる千歳市のアンカリトー 7 遺跡出土の石製品との比較を通して、形態的特徴をまとめた。旧石器時代の遺物と考えられることから、形態面で類似する北米や旧大陸の磨製骨角器を取りあげた。磨製骨角器の機能について主として北米の骨製棒を参照し、それらが狩猟用具として生業活動に用いられた点を確認した。磨製棒状石製品については機能が明確とはならないものの、中柄など生業活動に用いられる有機質の組み合わせ道具を製作する際に見本と

なった「模範品」という役割を考えた。この類推は当該遺物が生業に関連した道具であったと仮定したため、広義の機能的な解釈となる。今後、有機質が遺存する資料体の中に「模範品」に相当するような石製の遺物が存在するのかどうかについても探索の余地がある。

謝辞

アンカリト7遺跡出土資料について赤井文人氏よりご教示をいただき、資料見学に際して坂本尚史氏と倉橋直孝氏からご配慮をいただいた。置戸町所管資料について池田一登氏からご教示いただいた。文献入手にあたり木村英明先生、出穂雅実氏、澤井玄氏、矢原史希氏からご配慮をいただいた。末筆であるが御礼申し上げます。

注

- (1) オリジナルは、北海道大学総合博物館(大場の未発表原稿、トレンチ配置図)、および北海道大学文学書館(調査写真)が保管管理している。これらの記録資料はカタログ(中沢・伊藤編 2021)に掲載している。
- (2) 中学生なども含む市民参加型の発掘調査であった点や篩を用いて遺物を回収したとはみられないため、細石器を含むサイズの小さな遺物が回収されにくかった状況が考えられる。また、調査当時は広郷型細石刃核が細石刃核ではなく多面体彫器という認識だったことも調査者側のバイアスとして働いたかもしれない。学史的整理が必要である。
- (3) 遺跡から出土した遺物の集合単位に対してアッセンブレッジ(*assemblage*)を用いることが普通である。サケット(Sackett 1973:319)によれば、文化的な行動が属性に観察されパターン化するという前提から、アッセンブレッジは特定の時空間単位から抽出された遺物のサンプルと理解されている。トレンチ発掘によって得られた石器群(*lithic assemblage*)も、一定の技術的特徴を抽出することに基づき、特定の石器群が設定される。広郷型細石刃石器群は、広郷型細石刃核というユニークな技術形態的特徴のある細石刃核を伴うことが条件となる。ただし、田付遺跡のように細石刃よりも石刃の製作が主体となる石器群では、調査トレンチの位置や広がりなどによっては細石刃核が回収されない状況も容易に生じうる。調査当初に1トレンチ=1石器群や特定器種のあるなしなどと括られた石器群は、引き続き分析過程で表れるパターンに応じてその括りの範囲も修正される性質にある。解剖学第二講座の調査ではこのような石器群の認定作業はなされていない。
- (4) 池田一登氏(置戸町教育委員会)によれば置戸町内には類例がないという(2022年4月私信)。
- (5) 道具の種類によって使用期間が異なることは考古遺物のライフヒストリー分析からも明らかである(Schiffer 1985)。居住地の移動を基本とする狩猟採集社会では、道具の種類によって維持できる数が限られ、遺跡に残される頻度も異なる(Binford 1979)。
- (6) 旧大陸の後期旧石器文化や北米更新世末・完新世文化の遺存例からは、日本の後期旧石器の遺物には遺存しないものの、有機質のパーツからなる組み合わせ式の狩猟具を想定することに無理はないだろう。広郷型細石刃石器群に伴う明確な狩猟具のパーツとなる石器は細石刃を除くと尖頭器であり、いくつかの石器群で確認されている(加藤ほか 1971、上士幌町教育委員会 2022、濱口ほか 2011、北海道埋蔵文化財センター2015 など)。これらの尖頭器には有茎尖頭器も含まれる(山田 2001、山原 1998)。田付遺跡からも尖頭器や両面調整石器が出土している。なお、広郷型細石刃石器群の年代観については、研究者間で一致をみていないが、アンカリト7遺跡の恵庭 a 降下軽石層上位からの出土(北海道埋蔵文化財センター2010)からすると、少なくとも後期旧石器後半(約 20,000 年前を上限として)に出現・展開したと考えられる。

引用・参考文献

- 大谷敏三 2010『縄文人の祭儀場・キウス周堤墓群』新泉社・東京
- 加藤晋平・鶴丸俊明・水村孝之 1971「多面体彫器の問題」『考古学ジャーナル』57:10-22
- 上士幌町教育委員会 2022『萩ヶ岡7遺跡』
- 小林達雄編 1988『古代史復元3 縄文人の道具』、講談社・東京
- 鈴木宏行 2016「古北海道半島における MIS2・3期の白滝産黒曜石の採取とその変遷」『旧石器研究』12:23-46
- 鶴丸俊明 1995「「広郷型細石刃核」論—その形質と意味—」『論集日本原史』(論集日本原史刊行会編)所収:113-138、吉川弘文館・東京
- 直江康雄・鈴木宏行・坂本尚史 2016「白滝遺跡群の石刃技法」『晩氷期の人類社会』(佐藤宏之・山田 哲・出穂雅実編)所収:209-234、六一書房・東京
- 中沢祐一 2020「忘れられた置戸遺跡群」『第34回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』(傳田惠隆編)所収:36-45、東北日本の旧石器文化を語る会・宮城
- 中沢祐一・伊藤麻由編 2021『北海道大学所蔵田付遺跡(置戸町)収集考古資料』北海道大学・札幌
- 中沢祐一・矢原史希編 2017『北海道大学所蔵中里遺跡(置戸町)収集考古資料』北海道大学・札幌
- 野村 崇 1985『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房・札幌
- 濱口 皓・長沼正樹・出穂雅実・高倉 純・赤井文人 2011「北海道上川郡下川町北町高瀬遺跡の再検討」『環日本海北部における後期更新世の環境変動と人間の相互作用に関する総合的研究』(佐藤宏之編)所収:pp.146-192、東京大学大学院人文科学系研究科付属北海文化研究常呂実習施設・北見市
- フロパーチェフ, ゲンナジー・ギリヤ, エヴゲニー (木村英明・木村アヤ子訳) 2019『氷河期の極北に挑むホモ・サピエンス【増補版】』雄山閣・東京
- 北海道埋蔵文化財センター 2010『千歳市アンカリトー7遺跡・アンカリトー9遺跡』
- 北海道埋蔵文化財センター 2015『白滝遺跡群 XIV 旧白滝3遺跡』
- 山田 哲 2001『北海道における細石刃石器群の研究』六一書房・東京
- 山原敏朗 1998「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』34:77-92
- 矢原史希・中沢祐一 2018「北海道置戸町中里地区収集の細石刃核の検討」『論集忍路子』V:91-107
- Binford, L.R. 1979. Organization and formation processes: looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research* 35: 255-273
- Boldurian, A.T. 2007. Weaponry of Clovis hunters at Blackwater Draw. In: Neusius, S.W., G.T. Gross (Eds.), *Seeking Our Past: An Introduction to North American Archaeology*, Oxford University Press, Oxford, pp. 57-67
- Bradley, Bruce A. 1995 Clovis ivory and bone tools. In: Hahn, J., Menu, M., Taborin, Y., Walter, Ph., Widemann, F. (Eds.), *Le travail et l'usage de l'ivoire au paléolithique supérieur*, Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, Libreria dello Stato, Rome, pp.259-276
- Haynes, G.A. 2002. *The Early Settlement of North America: The Clovis Era*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Henrich 2004. Demography and cultural evolution: how adaptive cultural processes can produce maladaptive losses: the Tasmanian case. *American Antiquity* 69-2: 197-214
- Knecht, H. 2000. Design strategies of Early Upper Paleolithic bone and antler projectile technologies. *Anthropologie et Préhistoire* 111: 28-36
- Lahren, L.H., Bonnicksen, C.E. 1974. Bone foreshafts from a Clovis burial in southwestern Montana. *Science* 186: 147-150

- Lyman, R.L., O'Brien, M.J. 1998. A mechanical and functional study of bone rods from the Richey-Roberts Clovis cache, Washington, U.S.A.. *Journal of Archaeological Science* 25: 887-906.
- Pétillon, J.-M. 2013. Circulation of whale-bone artifacts in the northern Pyrenees during the late Upper Paleolithic. *Journal of Human Evolution* 65: 525-543
- Pitlko, V.V., Pavlova, E.Y., Nikolskiy, P.A. 2015. Mammoth ivory technologies in the Upper Palaeolithic: a case study based on the materials from Yana RHS, northern Yana-Indighirka lowland, Arctic Siberia. *World Archaeology* 47-3: 333-389
- Sackett, J.R. 1973 Style, function and artifact variability in palaeolithic assemblages. In: Renfrew, C. (Ed.), *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*. Duckworth, London, pp. 317-325.
- Schiffer, M.B. 1985. Is there a "Pompeii premise" in archaeology? *Journal of Anthropological Research* 41-1: 18-41
- Sutton, M.Q. 2018. Paleoindian-era osseous rods: distribution, dating, and function. *PaleoAmerica* 4: 183-201
- Tejero, J.-M. 2016. Spanish Aurignacian projectile points: an example of the first European Paleolithic hunting weapons in osseous materials. In: Langley, M.C. (Ed.), *Osseous Projectile Weaponry: Towards an Understanding of Pleistocene Cultural Variability*. Springer Science+Business Media Dordrecht, Netherlands, pp. 55-69
- Torrence, R. 1983. Time budgeting and hunter-gatherer technology. In : Bailey, G.N. (Ed.), *Hunter-Gatherer Economy in Prehistory: a European Perspective*. Cambridge University Press, Cambridge, pp. 11-22
- Wygall, B.T., Krasinski, K.E., Holmes, C.E., Crase, B.A., Smith, K.M. 2021. Mammoth ivory rods in eastern Beringia: earliest in North America. *American Antiquity* 87-1: 59-79

On the ground lithic rod from the Tatsuki site: an analogical reasoning to the function

NAKAZAWA Yuichi

Abstract: The present paper reports the ground lithic rod from the Tatsuki site, located along the upper Tokoro River, Oketo Town in eastern Hokkaido. Through a comparison to the techno-morphologically similar ground stone artifact from the Ankarito 7 site in southern Ishikari Lowland in central Hokkaido, observed morphological similarities and differences between these two unique artifacts are described. The archaeological layers where these artifacts were yielded and the lithic technological characteristics shared between these assemblages suggest that both stone artifacts are attributable to Upper Paleolithic. In terms of the overall morphology shaped by grinding, the ground lithic rods are compared to bone rods from the Old World Upper Paleolithic and North American prehistoric records. Given the recognition that the ground lithic rods are analogous to morphologically comparable bone rods in North American archaeological record, I give a functional interpretation that the ground lithic rods were used for an “exemplar” for manufacturing organic composite tools such as projectiles.